

# 都市装置のなりたちと文化

岡 並木

私は最近、お遍路さんが最後に詣でる香川県

長尾町の大窪寺を訪ねました。その道々、同町

造田公民館長の木村照一さんに案内されて、遍

路道の道標、遍路石を見て歩きました。シヨツ

クを受けました。たとえば「右へんろみち」と

彫つてある。その文字の上に、右を指す手の形

が彫り込んであります。しかも手首のところは

必ず長い袂が下がっている。なぜだか分から

ないようですが、袂から伝わってくるぬくもり

は、とても生々しく暖かな印象でした。

日本の道標の歴史はヨーロッパに比べるとか

なり進んでいたと思います。

四国の遍路道の道標は、江戸時代、一七世紀

の後半に立ち始めたといいますが、道標の歴史

は、さらに一二世紀にさかのぼります。鎌倉幕

府が編纂した歴史書『吾妻鏡』の中に、一一二

六年、当時の奥州の覇者藤原清衡が、旅人の目

標のために卒塔婆を立てたと、次のように書か

れています。

「白河関より外が浜（陸奥湾）に至る道は、

廿余日の行程である。その道に一町ごとに、傘

をのせた卒塔婆を立てた」。一町は約一〇九メ

ートル。現在の国道でも白河から青森までは五

六〇キロです。一町ごとに立てたとすると五一

四〇本。しかし、いまは影もない。道に沿つて

とどこどこに残る石の「一町仏」が、卒塔婆

に代わつて立てられたという説もあります。

一町ごとの道標といえば、和歌山県九度山町

慈尊院から高野山の金剛峯寺までの「町石道」

が有名です。一町ごとに石を彫つた卒塔婆が一

八〇本立っている。それぞれに梵字が彫られ、

その下に数字が刻まれている。慈尊院に始まる

最初の町石には「百八十町」とあります。この

数字が金剛峯寺に近づくにつれて減っていく。

高野山が開かれた八一六年以降、木製の卒塔婆

が建つたのが町石道の起源で、二三世紀後半に、

二〇年かけて石の卒塔婆が完成したといひます。

一七七五年に来日したオランダ船船医、スウェーデン人のC・ツェンベリーが、『江戸参府随行記』(高橋文訳)を残しています。その中に長崎から、飯塚(福岡県)への道で、次のように書いています。

「里程を示す杭が至る所に立てられ、どれほどの距離を旅したのかを示すのみならず、道がどのように続いているかを記している。この種の杭は道路の分岐点にも立っており、このような状況に私は驚嘆の眼を瞠った。野蚕とはいわぬまでも、少なくとも洗練されてはいないと我々が考えている国民が、ことごとく理にかなった考えや、優れた規則に従っている様子を見せられるのである。一方開化されたヨーロッパでは、旅人の移動や便宜をはかるほとんどの設備が、まだ多くの場所において全く不十分なのである」。

このように、見事な道標文化を持っていた日本ですが、第二次大戦後、モータリゼーション

が進んできて、気がついたのは、日本には道標がないということでした。欧米に比べて日本の道標は完全に遅れているという評判でした。事実、アメリカやヨーロッパの運転をするとき、どこへ行くにも安心して出発できます。それは必要なところに必要で分かり安い道しるべが必ずあるという信頼感です。

いつ、どこで、なぜ、日本の文化と、欧米の文化とはすれ違ってしまったのでしょうか。

下水の文化にも、これと同じことがいえると思います。

一九世紀半ばすぎまで、ヨーロッパは、下水を資源と考えず、ただ、下水道は流して捨てるだけの装置と考えていました。

ごぞんじのように、下水を、資源に出来ないかという実験と研究がパリで始まったのは、一八五三年でした。オスマンがパリの改造に着手して間もなくです。下水を農地に導き、農作物を育てる肥料に使うと同時に、水を農地に浸透させて浄化する実験と研究でした。もし尿尿の混じった下水が、安全に農作物の生育に役立つ

ことが証明できれば、パリは、トイレを下水道につなぐことが出来ると、オスマンや部下たちは考えたのです。

パリの関係者にこの実験と研究を思い立たせたのは、一八四〇年に、ドイツの有機化学者リービヒが書いた著書『有機農業の勧め』でした。彼は中国に旅をして、農民が人間の尿尿を肥料にしている姿を見た。ヨーロッパでも糞排水や尿尿といった都市の排泄物を大地に返し、肥料として生かすべきだと、彼は考えたといま

す。ところで、日本が中国から完熟した尿尿を肥料に使う知恵を学んだのは五〜六世紀のころです。私が申し上げるまでもなく、江戸では糞排水は、どぶ、小下水、大下水と呼ばれる下水網で集められ、最後にゴミを堰で取り除いたあと、川へ放流されていきました。放流された水の持つ養分は水中のプランクトンを育て、そのプランクトンを食べて江戸前の魚が育ちました。また尿尿は近郊の農村に買い取られ、生ゴミは浅瀬で埋め立てに使われ、土壌に変化していきまし

た。

このように都市の排泄物を資源として生かしてきたからこそ、江戸では経口伝染病の大流行が、二六五年間に三回でとどまったのです。しかし、都市の排泄物を捨てるだけだったヨーロッパでは、二〇年、二五年ごとに経口伝染病が大流行を繰り返していました。

パリが、大規模な灌漑農場の実験に成功し、トイレを下水道につなぐことが認められたのは一八八〇（明治一三）年。さらにセーヌ浄化法が出て、トイレを下水道につなぐことが義務になったのは一八九四年です。

その一三年後、東京の新しい下水道計画が発表されました。それまでの東京の下水道は、デレーケやバルトンらお雇い外人の強いアドバイスによって、尿尿は下水道には流さずに、畑へという考え方でした。それが新しい計画では尿尿も雨水も流して捨てるという考え方に変わった。

いい換えれば、日本の考え方は、かつてのヨーロッパの流して捨てる方向へ、一方ヨーロッパ

パはかつての日本の土に返す方向へと、なぜか価値観が交差してしまつたのです。

いまの日本よりもフランスは農業国、そして東京よりもパリは、下水道に重金属類を流す工場が少ないのかも知れません。しかしパリは、下水を一貫して「資源」と考へる考へ方を、一九世紀後半以来、持ち続けてきたといえるでしょう。

都市の排泄物の始末に対するヨーロッパの考へ方が変わり始めた一九世紀後半は、ほかの環境を見る目にも変化が起つてきました。

一八九五年に、京都で日本初の路面電車の営業が始まっています。ところが当時の先進都市であつたロンドン、パリの路面電車は、一九〇三年にやっと開通しました。ロンドン、パリの遅れは、電車を動かす電力を、どこから取るべきかで論争が続いたからです。架線からポールで集電すれば、コストが安い。いやそれでは街の景観が壊れる。コストは高くても、線路の間に溝を掘り、そこに送電プレートを敷いてとるべきだ。このような論争が続いていたのです。

京都ではその論争はまったくなかつた。

結局パリでは、一八九八年に電線地下埋設法が施行されて架線は禁止となり、同年路面電車の工事が始まつた。ただしパリ市を出れば、架線からの集電を認められたので、郊外まで出ていくパリの路面電車は、ポールも備えていました。

ロンドンでは一九〇〇年に、ロンドン郡議会在架線からは集電しないと決議しました。法律ではなかつたために、一九〇一年、ロンドンの西の町外れに開業した民営の路面電車は架線を使いましたが、一九〇三年に都心で開業した郡営の路面電車は、決議通り地面から集電するようになった。アメリカの首都ワシントンの路面電車も集電は地面からで、開業は京都より三年遅い一八九八年でした。

実はこのように架線は街の景観を壊すという考へ方は、路面電車の前から生まれていました。電力を使う街頭の照明は、まずアーク灯で始まりました。パリ北駅構内の照明が最初だといわれていわれますが、それは一八七五年です。こ

の時だけは電力は架線でもつてきた。地面に埋設するのに適した被覆線がまだなかったからです。しかしその被覆線は間もなくでき上がり、二年後にパリのルーブル宮と、ロンドン・テムズ川沿いのプロムナード「エンバンクメント」でアーク灯照明を始めたときは、全部埋設ケーブルで配電したのです。

一八八〇年にアメリカでエジソンが白熱ランプの大量生産を始めました。同時に電灯用の電力線は地面に埋設すべきだと考え、埋設用のエジソンチューブを、彼は売り出したのです。ロンドンは一八八二年に市内に白熱ランプを採用するとき、最初からエジソンチューブを使って配電しました。

ところで日本は一八八五（明治一八）年に上野駅開業記念として臨時に駅の中で白熱灯を点灯しましたが、本格的に大量の白熱灯を採用したのは、一八八六年、大阪紡績の工場でした。防火と作業の効率を挙げるためです。大阪紡績はこれによって深夜労働ができるようになりました。電力は自家発電だったので、架線か否か

という問題は起こっていませんが、その後電灯が全国へ普及していく過程でも、エジソンチューブへの関心は起こらなかったのです。

一九世紀後半のイギリスでは、産業革命の余波で、遺すべき古い建造物などが破壊され、自然破壊も進行しましたが、一八九五年、三人の人物が、ナショナル・トラスト運動を起こしました。これは、保護が必要と考えられる対象の所有権を獲得して、開発や破壊を押さえようという活動です。英政府は一九〇七年、この運動を助けるために、ナショナルトラスト法を制定、ナショナル・トラストに、入手した財産譲渡不能の特権を保証したのです。

このヨーロッパの変化の方向は、日本の祖先が、かつてたどってきた方向でした。それが一九世紀末から日本は、かつてヨーロッパたどってきた道を歩きました。当時日本にいた外国人の目は、それを敏感に感じ取っていました。

たとえばラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は、一八九四年に書いた『知られざる日本の面

影』の中でこう書いています。

「日本の新しい高等教育は、西洋と東洋との距離を広げているに過ぎないように見える。そして日本の高等教育は、庶民の間には殆ど認められない物質主義を異常に助長している、という観察者もいる。西洋の高等教育は、情緒的感性を知識の拡大と結び付けるのが普通だが、日本の高等教育は、高級な情感を刺激する力を持たず、若者を特殊な方向へ追いやっている」。

一八七六年から二五年間、東京帝国大学医学部で教えてきたドイツ人のベルツ博士は、次第に外国人を疎んじ始めた日本人同僚の視線に嫌気がさして、一九〇一年に東大を去りました。その送別会の席でこんなスピーチをしていました。

「私たち外人教師の使命は、日本に『科学の樹を育てる』ことでした。しかし日本人は、西洋の科学の木に育った実だけを、私たちから受取ろうとしたのです。私たちの実を、欲しがるだけで、この実をもたらしただけの精神を学ぼうとはしないのです」。

ヨーロッパは、対症療法の時代から原因療法の時代に、日本は、原因療法の時代から対症療法の時代へと変わりました。それから一〇〇年。日本の最初の五〇年間は富国強兵の五〇年でした。そして敗戦。次の五〇年は経済成長を急ぐ五〇年でした。そしてバブル経済の崩壊。しかし、いま日本に確実に軌道修正の動きが起っています。軌道修正の行方には、かつての日本文化でもなく、いまの西欧文化でもなく、その混合から生まれる新しい文化が育ってくると思います。おそらく五〇年は先のことでしょうが。